

<<東北魂>>を鼓舞する  
電子新聞

発行所 株式会社遊無有

〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1-2-2  
http://www.yumuyu.com/  
e-mail:yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

# 東北復興

## Rising up, TOHOKU!

2014年(平成26年)3月16日 日曜日

無料

# 第22号

毎月発行

創刊2014年(平成26年)3月16日 日曜日

## 3年目からの東北二段階復興論

けっしてあきらめてはならない、復興はこれからである。大胆な住民合意と懸案課題の東北再興の二段階で再スタートすべき

まだまだあきらめない

東北大震災発生から今日11日で3年目を迎えた。新聞、TVなどのマスメディア各社は3年目の節目で騒ぎたてていた。多少の違和感もあるが、無視され、忘れ去られるよりはましだと我慢するしかない。それにしても、復興が遅れているのは事実だが、その復興遅れを声高に指摘するありきたりの論評、定型化したコメントはこれまでに何度も耳にし、きつとこれからも反復することだろうが、この重大事態と釣り合わず、あまりにも軽すぎる。当新聞がその路線を踏襲するのでは、そもそもこの新聞を発行する意味がない。そのため、厳しい被災地の現実を前にして、直接の被災者でもなく、少し離

れた立場からではあるが、これまでを振り返り、今後の復興について少しでもお役に立てるよう、いろいろな提言したいと思う。そして、何よりも3年目であきらめてはいけないことを強く伝えたい。まだまだ効果的な本格復興が残されていること、そこに少しは耳を傾けて欲しいと心から願うのみである。

### この3年を 大震災受け止め期間 と位置付ける

震災直後は、直接の被災者はもちろん、あの津波映像を見た人々もみな、驚愕と動揺と悲嘆との瞬間以後の生きる基盤ともいえるべきものの喪失状態、ショック状態に突然突き落とされた。まさに混乱の極みであった。あ

あ、そのとき以降、その状況のなかでみなもがき苦しんだ。しかし、なかなか「出口」を見つけれずに来た。あれから3年経ち、大分冷静さと客観性を取り戻し、この3年の振り返りができる状態になってきたと思う。

そして、この震災の規模があまりにも大きすぎ、しかも何もかも破壊したというところがはつきりと認識できる状態になった。

直後何が破壊されたのか判断しなかつた。見える破壊は誰の目にも明らかである。しかし心の中で破壊されたものが何なのか

が明確な形となるまでに長い時間が必要だったのだ。破壊されたものとは、それまで無意識のうちに心の拠り所としてきた価値観であり、考え方やあり、あるいは社会への信頼感、生活基盤を形成する諸々の約束事への信頼感、自然と人間との関係に関する楽観的な考え方、科学技術への根拠のない信頼感、その他生きていくための基盤となるべきさまざまな事柄への信頼感など広範囲に亘るものであった。

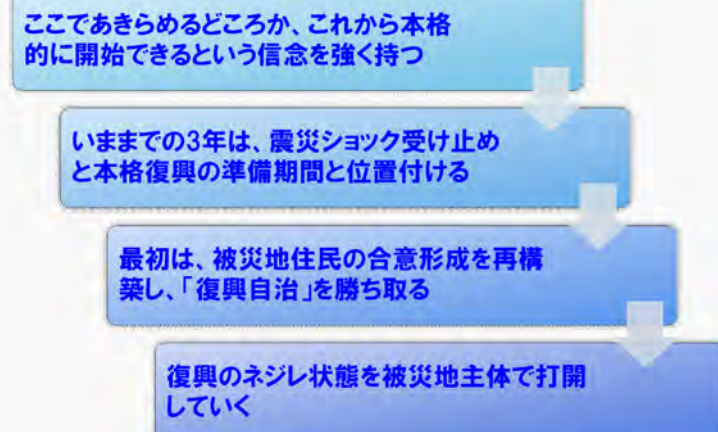
ならば、3年過ぎて徐々に復興活動が衰えていくという考え方はなく、むしろ3年という震災ショックの受け止め期間を終えてから後、これから本格的な復興に取りかかると考えてはどうだろうか。何をいさらと言われるのを覚悟の提言である。

### 振り返り・・・ この3年間の動き

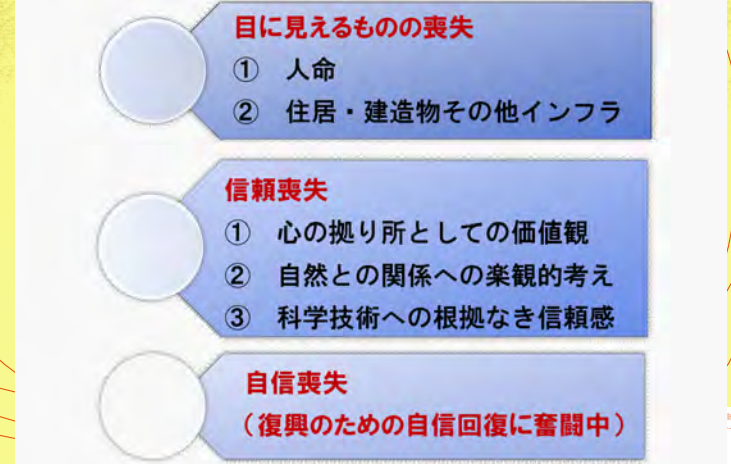
まず、この3年間の動きを大雑把にまとめてみよう。いまざっと思い起こしても、すごい道のりであったことは確かである。

震災発生直後は、復興はさておき、生存者発見とご遺体収容、行方不明者探索、生き残った被災者の「食」と「衣」の確保であった。

## 3年目で東北復興は大転換するという信念を持つ



## いまだから判明した大震災で失ったものとは？



すべて綿密な取材に基づいていえるとは言えないので、「推測の構図」として記載してみた。

最初に復興の方針を打ち出したのは、各被災地の首長であったらう。

彼らは、当然のように、震災発生前の状態を回復することを、復興計画の基本としたはずである。それ以外の選択肢を要求するのは酷であろう。てんやわんやの状況下で別の選択肢を検討する余裕もなかった。

当時それは被災地の最大公約的な選択肢にもなりえたはずである。首長に対し、将来を見据え、被災地の人口が減少する計画を立てよと言うのは酷である。

しかし、これは現在、復興の大きなブレーキとなつてしまつた。

一方、国側は、周知のように、緊急時体制を構築することなく、平時の手順・方法で状況に対応しようとした。いわゆる悪名高き官僚方式で、融通がきかず、杓子定規の手法で、とても刻々変化する被災地事情に合致する手法とは思えないが、政治家が乗り出し、緊急時の臨時体制を敷かない限り、当然の帰結である。

鳴り物入りで出来た復興庁も予想通り、官僚機構にがんじがらめにされ、身動きが取れず、迅速な復興対応ができない。

一方、被災地住民はともも復興計画を検討する余裕などなかった。日々の生活の再建に追われていた。また震災のショックから立ち直るのにも多くの時間を要

これは非常に大雑把な3年間の概観ではないだろうか。

### ねじれた構造の推測

メディアで伝えられた誰の目にも分かりやすいこれらの3年の動きの底流に、現時点における「復興ねじれ状況」を引き起こしたと推測される動きが複雑にか

## この3年間で発生した復興ねじれ状況推測の構図

- 各被災地首長は、震災直後、震災発生前の状態を回復することを国に望み、そのための復興予算申請に至った(現在も変更はしておらず、被災地現状とかい難)
- 国は緊急時特別臨時体制ではなく、既存の平時体制からの手順で施策検討を行ったが、必ずしも被災地状況に合致した柔軟な施策とはとても言い難い
- 被災地、被災者は、震災ショック受け止め、冷静さを取り戻すのに時間を要し、その間、復興要望も変化してきた
- 被災地住民の合意形成に時間がかかりすぎ、また、使いにくい復興施策案をめぐり、住民同士が激しく対立し、いまだ解決せずにいる
- 3年後のいま、被災地での生活再建を望んでいる被災者、また、生活できる街としての店舗網や公共施設再建などは大きく変化・縮小してしまい、住民数回復も困難。他方、復興予算は震災前の状態回復が前提であり、復興計画見直しが必要なのに、見直しができない。

した。その後、住宅の再建にあたり、高台移転問題が起きた。沿岸被災地ではあまりにも高すぎる防潮堤問題が起きた。

それらを行政側から提示され、住民合意を求められたが、仕方なく賛成する派と反対派に分裂して対立した。どんどん時間が経過したが、深まるのは対立ばかりであり、復興は遅れた。

その他にも、復興予算の使い方には厳しいしほりがつきまじった。予算申請条件から少しでもずれると却下された。また防潮堤予算が不要なら、他の復興予算も不要だろうと脅された。

他方で、復興予算の目的外流用問題が起きた。被災地での厳格運用と比較すると、被災地を復興させよう

### 3年目からの東北二段階復興論の概要

- この3年間でどう位置づけるか**
  - 大災害を受け止めるための時間
  - 復興取組へのあらゆる準備の期間
- 住民合意形成から復興自治へ**
  - 仕切り直しても住民合意形成必要
  - まず住民ありきの復興プラン作成
- 復興計画全体の見直し運動へ**
  - 復興計画差し戻し事例の大々的PR
  - 「3年目からの復興運動」開始
- 震災前から衰退の東北を再興へ**
  - 正確なデータに基づく再興計画
  - 「新しい東北像」検討開始

という気持ちに欠如しているのかと感ずるほどだ。

また、時間が経過するに連れ、被災地は元に戻らないことがはつきりしてきた。住民が全員戻らない。

人口が減れば、商店街も復活しない。高台移転を予定した住宅建設地も縮小を余儀なくされる。それに連動して他の復興計画も見直しが必要となる。

それでも、復興計画の全体像を見直そうという機運は見られない。

大雑把ではあるが、残念ながら、これが被災地の現実ではないのか。本当にこのままでいいのだろうか。

### 提言―二段階復興論

そこでこれまでの復興論を一旦棚上げしてあらため

て東北復興を考えてみたい。

しかし福島第一原発からむ諸問題も一旦棚上げしておくことにする。この問題は別次元の問題である。

考え出した提案とは、一言で表現すれば、『3年目からの東北二段階復興論』ともいべきものである。

その二段階とは、まず新たな住民合意問題解決であり、もう一つは、震災前から衰退していた東北の再興という二段階の組み合わせである。

住民合意に関しては、これまでの住民合意ではなく、もっと大胆な住民合意の形成である。

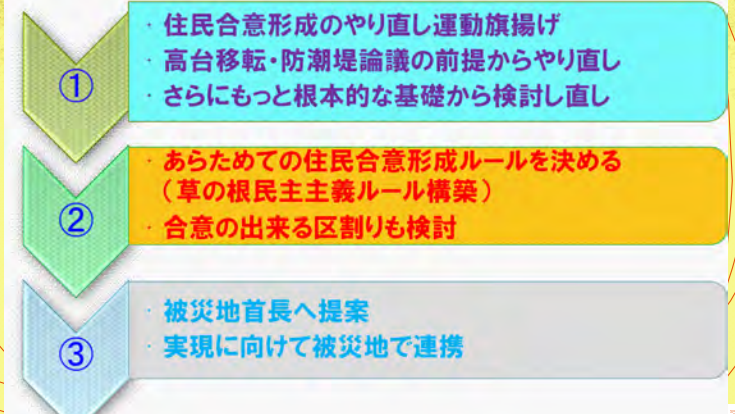
もう一方の東北再興に関しては、震災により東北が衰退したという論調が多いが、そうではなく、震災前からの継続課題であったことを特に強調したい。たとえば、震災で人口流出が大きくなったという見方が大勢であるが、けっしてそうではない。

それらを踏まえて、二段階の復興推進は3年で徐々に衰えていくのではなく、むしろ本格復興は3年目からスタートするという前提条件つきであえて提案したいと思うのである。

### 錯綜する住民合意問題

最初は「住民合意形成」問題である。合意が形成出来ない行政による施策を決定でき

### 復興自治獲得のステップ



ず、そのため復興が遅れたという考え方があ

先、長い復興にあたって、スタート時点で大きくつまづいた格好の住民合意形成であるが、やはり被災地主導で最初からやり直しすべきである。そのためには、議論のベース作りからやり直すべきである。

同じ被災地にながらこれからもずっと反目し合うのは、双方にとってこの上ない損失であり、このままでは永遠に復興のスタートが切れないし、第一、暮らしていくことこの上ない。合意ができれば、せいぜいが、行政から強制的に諸施策を押し付けられ、後に現地事情に合わないというところで大修正を迫られる可能性が大きい。そこに永年の反目のおまけつきで

### 復興自治―住民合意なしに復興はあり得ない

は被災地もいたたまれない

そうならないためには、住民だけによる、そして今後住民および被災地主導で切り拓いていくような「合意形成やり直しの機運」―『復興自治運動』を盛り上げるべきである。

加えて、これまでのいきさつを一旦棚上げし、行政の提案を棚上げすることである。そのうえで、住民だけであるべき姿を話し合うことだ。

そのためには、草の根民主主義のあり方模索し、まずは、個々の主張ではなく、集団同意を形成することを最優先することを再確認し、必要以上に自己の事情

を優先すべきではない。優先すれば、永遠に復興はスタートできないことを全員が再確認すべきである。

そして、十分な話が出来た後は多数決で決することだ。あとはその結論に従うことである。被災者全員の完全な合意追求はだれのためにもならないのである。

それから、こうした流れを作るために、とにかく集団で声を上げてみることに。同じ思いの被災者はたくさんいるはずである。

それから、行政側から押し付けられそうになった復興計画を差し戻した被災地の実例があるので、それに見習い、大きな運動に育てていくべきである。やろうと思えば出来るのである。あきらめてはいけない。

### 常識破りの住民合意

ではどのようにするか

あるが、話合いの前提条件を明確にするプロセスを踏み、全体の枠組みを確定することである。枠をはめな議論は結論を出せない。それから、被災地が完全に元通りにはならないこともはつきりと認識すべきである。何かは捨てなければならぬことを前提に話し合わなければならない。

また、人間は一人では生きていけない。さらにあまりにも小さな集団だけでも生きていけない。したがって、ある程度人があつまり、比較的中規模の集団を形成しつつも、住民合意が出来

そんな「区割り」を模索することである。

それも100%の合意はあり得ないので、例えば2/3以上の賛成が得られる「区割り」の模索である。

### 詳細より、まず大きな合意形成を先に

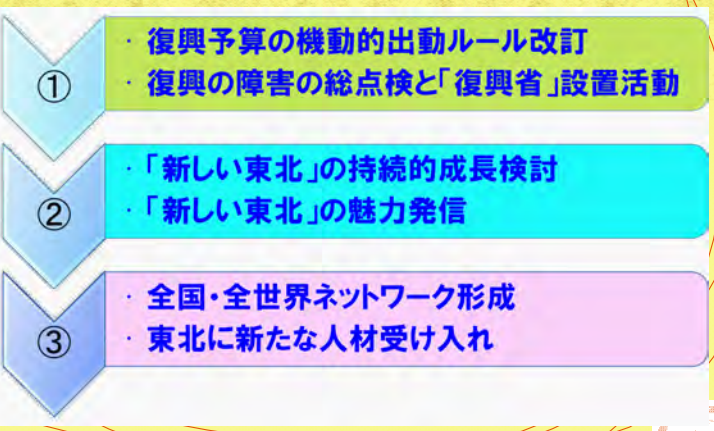
住民合意ポイントの候補の例として以下を提案する。

- ① 住民数の震災前回復追求か、否か
- ② 震災前の街に復するか、思い切って変えるか
- ③ 津波から逃げる対策を求めるか、完全に防壁する対策か(防潮堤の高さ問題以前の課題)
- ④ 高台移転は必要か、否か(とはいえず水没した地域には建設不能)
- ⑤ 災害は津波だけではない、他災害との関係をも考慮すべきか、否か
- ⑥ 高齢者だけの街を受容するか、否か
- ⑦ 「よそ者」を受容するか、拒否するか
- ⑧ 新産業を呼ぶか、従来通りの産業で衰退もやむなしか

### 震災前から衰退の東北再興に必要ないこと

今年3月4日の日経新聞に、大阪大学・林敏彦名誉教授の興味深い分析と提言が掲載されていた。(「経済教室」抜粋しつつ、ポイントをまとめる。

### 東北再興実現へ



① 復興予算執行遅れの原因は、巷間言われるような工事単価上昇や人手不足、専門人材不足、住民合意形成問題ではなく、臨機応変に公的資金を活用できない制度の制約問題が大きい

② この問題解決は可能で、アメリカの9・11対応、台湾集集大地震対応でも成功事例がある

③ 中期課題は被災地の域内総生産引上げで、「新しい東北」の持続的成長が必要だが、復興推進委員会も政府案も検討が不十分である

④ 東北の人口減少はすべて災害によるものではなく、震災前から続く自然減少が災害影響よりはるかに大きい

⑤ 新しい東北は被災者同士の助け合いだけでは実現できない。新しい人口をひきつけるため、どのような魅力为全国・外国にアピールするかを長期目標とする

マスメディア等による情報とそれらが形成するイメージに寄りかかりすぎると実態を見失うリスクが大きい。丹念にデータを追跡するところから、新たな「東北復興像」が開けてくる可能性は大きい。

長い復興期間である。ここでの拙速はあとと後悔するにしろ。道のりは確かに、遠く険しく、きびしいが、あきらめてはいけない。

## ② 民間で出来る復興事業募集の呼びかけ

当新聞の第20号8面「民間復興プロジェクトによる東北復興は可能か?」というネットアンケート結果を掲載している。そのなかの質問項目の第7番目は「民間復興プロジェクトのテーマ」であったが、「食文化含む観光事業関連」が、全体の約6割の回答、次に多かったのが、「アートや文化関連」が2割強という結果であった。東北の食文化を観光事業

## 今後ますます活動を活発化する復興支援の具体的企画のコーナー

- ① 「とにかく東北を語る会」お誘い
- ② 「民間で出来る復興事業募集」
- ③ 「三陸酒海鮮会」(渋谷開催 / 日本橋開催)

### ① 第二回

### 『とにかく東北を語る会』へのお誘い

第二回「とにかく東北を語る会」を3月21日(金)に下記要領で開催いたします。堅苦しい会ではありません。出入りも自由、参加費もなしで、「とにかく東北について何か語りた」という人が集まって、特に話題もしぼることなく語り合おうという会です。ぜひご参加ください。

前回の初回は、入れ替わり立ち替わりで9名が集まりました。職業もさまざま、とからめて展開することに6割の方が賛成しており、また、東北の文化・アートに関連する事業に賛成しておられる方も2割存在しているということがあります。

興味もさまざま、年齢もさまざまでした。女性も参加しました。狭義での東北被災地の復興論議に限定せず、政治色もなく、何でも話題にしてみました。東北の歴史を語る人、教育を語る人、音楽を語る人、お酒を語る人などがおりました。構えずに参加出来る会です。特に予約も必要ありません。お待ちしております。

次は、事業プランの具体案があればいいのではないかと思います。当新聞第20号の1面で「東北を世界にアピールするプロジェクト」を

### どんなプロジェクトを企画するのか

- 東京を経由して世界を目指す二段階方式ではなく、いきなり世界へ挑戦するプロジェクト
- 従来の東京発・日本発の手法とは異なった方法、東北発のオリジナル手法で事業化する
- 東北人自身のみによるテーマ掘り起しではなく、外部の人間の眼で東北の魅力を発見してもらう
- プロジェクト企画の大前提として、中央への引け目、被害者意識と自虐的東北像を捨てる
- プロジェクトの分野候補は、未発掘の東北文化、東北アート、東北の食文化、東北の観光など

### どんな方法で実現していくのか

- 大量資金が必要な巨大なインフラ事業などを狙わず、夢のある事業で、かつ出来るところから開始する
- ボランティアではなく、完全な営利事業とする
- 民間資金限定プロジェクトとし、行政の関与をまったく受けず、自由奔放に活動する
- 極力お金をかけない、人的ネットワークを最大限に集約することでコストを吸収する
- 人もモノもカネも東北内に限定せず、東京その他国内、海外の外部を拒まず、「外」と積極的に連携する
- 当新聞が、人的ネットワークの基点となり、つなぎ目の役割を担う
- 8面にプロジェクト企画の募集要領を掲載しました

呼びかけた次第である。いまのところ、応募は寄せられていないが、気長にお待ちしたい。応募があれば、入念に検討させていただきます。

当新聞が何らかの形でサポートするか、あるいは関係するプロフェッショナル集団をご紹介するなりしたいと考えている。

### 会場：純喫茶 星港夜

(シンガポールナイト)

TEL:022-222-2926

宮城県仙台市青葉区上杉 1-12-1  
北四番丁駅から徒歩 360m

日時：2014. 3. 21 (金) 17:00 から  
終了時間特に設定せず  
出入り自由

参加費：無料、ただしご自分で頼んだ  
コーヒー類は自己負担です

### ③ 三陸酒海鮮会

第6回渋谷開催 (2/22)

第4回日本橋開催 (3/13)



ホタテとかき



カキのバターいため

宮城産カキ価格下落  
先日、宮城県産のカキの価格下落のニュースを見ました。かつて全国2位の水揚げを誇った宮城県産カキは今シーズン、震災前の4割弱まで回復する見通しの一方、価格は低迷気味とのこと、平年価格より3割も下落しているようです。原因は、震災後、生産者の廃業が相次ぎ、また後継者不足も深刻化していることと、足元も先行きも、供給力が不安定になつていて、以前供給トラブルに巻き込まれた仲買人が取り扱いの拡大をためらっているのが原因のようです。他方、カキそのものはこの二〇年間で最も実入りの良い出来ばえという生産者もいて、殻むき作業をする処理場も順調に回復しており、まことに皮肉な状況となっております。

そんなことで、宮城県内の小売店では広島県産や岡山県産が目立つということであり、筆者の住む東京多摩地区でも同様、宮城県産カキを見かける機会がほとんどありません。こうした宮城県産カキの現状を好転させるため、三陸酒海鮮会も何とかしたいと思えます。

三陸海産物を食べ、三陸のお酒を飲みつつ、三陸の復興に少しでも貢献しようというこの三陸酒海鮮会も会を重ね、カキシーズンには、参加者がおいしくカキをいただけてまいりました。前回の第6回渋谷開催は、2/22(土)でした。おかげさまで、昨年末に比べ参加者も増えました。お酒の種類も増えました。若手のご参加が多く、用意したお酒が底を尽きそうでしたが何とか間に合いました。ありがとうございました。

第4回日本橋開催は、3/13(木)でした。定員一杯のご参加をいただきました。相変わらず、酒豪揃いで、またたく間に一升ビンが次々と空になっていきました。両開催とも、今後たくさんのご参加をいただき、たくさん三陸産カキを消費し、ひいては可能な限り三陸の水産業復興支援をしてまいりましょう。



東北のお酒ラインアップ—渋谷開催



若手が盛りあがっております

# 3回目の「3・11」

## 復興の現状

3月11日は言うまでもなく、東日本大震災発災の日である。この日が近づくにつれて、新聞各紙やテレビで震災をテーマにした特集記事・番組が増える。その中では、震災からの復興における課題や問題点などについても数多く取り上げられている。実際に課題や問題点があるのは事実であるのだから、それらについてはここでは繰り返さない。

復興の現状については、復興庁が定期的なまとめている。復興に関する客観的なデータが把握でき、有用である。最新のものは1月17日のものであるが、その内容は概ね以下の通りである。

- ・被災3県における人口は減少傾向にあるものの、社会増減率は沿岸市町村においても震災前の水準に戻りつつある。
- ・災害廃棄物(がれき)は福島県の一部地域を除き、平成26年3月末までに処理可能な見込み。
- ・公共インフラの復旧・復興については、海岸対策、海岸防犯林の再生は概ね6割弱の着手、1割台の完了。河川対策、水道施設、下水道、災害廃棄物の処理は概ね9割超完了。復興住宅、防災集団移転、土地整理、漁業集落防災強化は概ね6割前後の着手、1割前後の完了。医療施設、学校施設等は概ね9割超完了。復興道路・復興支援助道路は37%完了。港湾は77%完了。農地は63%完了。漁港は37%完了。養殖施設は84%完了。
- ・鉄道については被災総延長2350.9kmのうち、運行再開区間2079.7km、運休区間271.2km。

・現在の売上げ状況が震災直前の水準以上まで回復している。回答した企業の割合は、36.6%。平成24年度の被災3県の工場立地件数は、前年度より31件増(48%)の95件。

・農業・水産業・観光業も改善が見られるが、本格的な復興が今後の課題。

・被災企業の復興に向けた進捗状況は地域格差が顕著。・税制上の特例の適用を受けることができる指定事業者による投資見込額は約1兆1300億円、雇用予定数は約82600人。

・福島県では、避難指示区域等からの避難者数が約10.2万人、福島県全体で約14.2万人。うち福島県外への避難者数約5.1万人。

・除染の進捗状況については、国直轄除染地域では対象11市町村のうち、9市町村の全域又は一部地域において除染の作業中、1市で除染が終了。市町村除染地域では、94市町村において特に子ども空間や公共施設において除染が進捗し、予定した除染の終了に近づきつつあるが、全体が終了するまでには更に数年はかかる見込み。

一方、株式会社マクロミルは、「震災白書2014」を公表している。全国と岩手・宮城・福島の東北3県在住の20〜69歳の男女を対象に「東日本大震災に関する調査」を実施した結果をまとめたものである。その中では生活の復旧状況についても聞いています。

それによると、日常生活が東日本大震災前の状態に「完全に戻った」と答えた人の割合は、全国で54%、東北三県では39%と差があることが報告されている。復興の現状は概ねそのような状況である。

震災の「風化」をどう捉えるか  
今、頓に震災の「風化」が言われている。先の「震災白書」でも震災に関する情報が減ったと回答した人は7割にも上る。

しかし、情報が減ったから風化が進んでいるのかと言うと、そのせいばかりではあるまい。風化させているのは震災からの「時間」である。それは被災地においては、過酷な体験、悲しい体験に対する痛みを、忘れることで軽減しようとする人間の正常な反応である。

また、被災地以外の地域に住む人にとっては、震災に関する情報の上に日々、日常の情報が積み重なっていくわけであるから、やはり震災のことが次第に薄れていくのはやむを得ないことであると思う。

ただ、被災地の人が「風化」によって何を恐れているのかと言えば、いまだ復興していない自分たちが忘れ去られてしまうことである。

## 復興の現状

震災で直面したことが時間と共に風化していくのはある程度やむを得ないことであるとしても、決して風化させてはいけないものがある。そのうちの1つは防災に対する意識である。これまで風化させてはならない。東日本大震災で被災地が得た教訓、ノウハウ、並びにそうしたものに基づく防災意識は、ぜひこの地域に住まう人にももちろん、他地域の人にも持ち続けてほしい。それが来たるべき次の災害への何よりの備えとなる。

もつと根源的には、生かされていることへの意識も風化させてはならない。3年前のあの日、最も強く思ったことは、昨日の次に今日が来て、今日の次に明日が来るのが当たり前と思っていた日常が、いとまたやすく崩れるということであった。ある日突然、来るべき明日が奪い去られてしまうことがあり得るということであった。何の前触れもなく、突然命が断ち切られてしまうことが起こり得るということであった。

こうした意識が、3年を経た、日常の中に埋没して薄らいでしまっていることを私自身、強く感じている。そうして、昨日の次の今日を更に迂闊に生きてしまっていることを思う。

毎年来る3月11日は、否が応でもあの日のことを思い返させてくれる。3年前の今頃何をしていたか、どんな状況だったか、やはり改めて思う。誰でも、いつ人生をチェックアウトすることになるか分からない。ならば、今日チェックアウトするとして、果たしてそれを受け入れられるのかどうか。それを日々自分に問い掛けたら、この日が来る度に思う。

貞観地震からの復興  
今回の地震と類似性が指摘される地震がある。貞観11年(869年)のいわゆる貞観地震である。

この年の5月26日夜、マグニチュード8.4以上とされる巨大地震が陸奥国(現在の岩手・宮城・福島三県)を襲った。この地震によって、家屋が倒壊、土地は地割れし、多賀城内の城郭・倉庫・門・櫓・築地塀なども倒壊した。また、城下に押し寄せた大津波による溺死者が10000人に達するなど、この地が壊滅的な被害を受けたことが「日本三代実録」に記されている。津波堆積物の研究から、貞観地震における津波浸水域が、今回の東日本大震災におけるそれとほぼ重なっていることが明らかになっている。

この地震における甚大な被害からの復興の様子も一部同書には記されている。それによると、朝廷はまず9月7日に紀春枝という人物を「檢陸奥国地震使」に任命し、陸奥国に派遣した。

10月13日には、天皇の詔が出され、税を免除すると共に、独力で生活できない住民に食料を配給している。併せて、各地の神社で祈祷を行わせている。また、当時高い技術を持っていた新羅人10名を「陸奥国修理府」という復興の拠点に派遣している。

その後、これらの復興策がどのようになったについては同書では触れられていないが、その後元慶2年(878年)に出羽国で起きた元慶の乱の際に、陸奥国から2000もの兵が派遣されていることから、この頃にはある程度復興が成し遂げられていたものと推察される。

今年の「3・11」  
3月11日、仙台市の沿岸、荒浜地区に足を運んでみた。がれきこそすべて撤去されたものの、それだけである。この日は猛烈な北西の風が吹いていたにも関わらず、海は波静かで、3年前のこの日、この地で起きたことが信じられないくらいであった。

地区内にある浄土寺は津波で本堂始め建物を全て流されてしまったが、現在同じ場所にプレハブの仮本堂を建てている。毎年この日には地区の合同法要を行っているとのこと、今年も普段は別の地域で避難生活を送っている住民が集まり、住職の読経に手を合わせていた。住職はこの地で亡くなった人の名前を一人ひとり挙げて供養していたが、なかなか途切れないその数に、改めてこの地で亡くなった人の多さを改めて実感する。

地区にある仙台市立荒浜小学校。津波が校舎の2階部分にまで押し寄せた痕跡が今も残る。これが証拠となつて、あの日仙台平野を襲った津波が、平野部の津波としては観測史上世界一の高さであったことが判明した。その校庭では、地元荒浜の復興・街づくりを中心としたプロジェクト「HOPE FOR Project」が集まった地元の人と一緒に花の種を入れた風船を大空高く飛ばしていた。荒浜から飛ばした花の種が、どこかの地で芽を出し、花を咲かせるかもしれない、と考えると、まさにそれは一つの「HOPE」である。

140年前の大地震から東北は復興を遂げている。しかし、それは決して2、3年のスパンでのことではなかった。ここからも復興においては、最低10年のスパンを持つて見ていく必要があることが分かる。

幸い、東北人は地道に取り組むことに長け、粘り強くと評される。腰を据えて復興に取り組んでいくのは得意なはずである。目の前のできることを一つひとつやっていく。その積み重ねの先に、復興の成就是あるに違いない。

## 執筆者紹介

大友浩平

(おおともこうへい)

奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。

「東北ブログ」

http://blog.livedoor.jp/anagmas/



Facebook  
https://www.facebook.com/kouhei.otomo

「震災白書2014」を公表している。全国と岩手・宮城・福島の東北3県在住の20〜69歳の男女を対象に「東日本大震災に関する調査」を実施した結果をまとめたものである。その中では生活の復旧状況についても聞いています。

「風化」によって何を恐れているのかと言えば、いまだ復興していない自分たちが忘れ去られてしまうことである。

決して「風化させてはならないもの」

「風化」によって何を恐れているのかと言えば、いまだ復興していない自分たちが忘れ去られてしまうことである。

「風化」によって何を恐れているのかと言えば、いまだ復興していない自分たちが忘れ去られてしまうことである。

「風化」によって何を恐れているのかと言えば、いまだ復興していない自分たちが忘れ去られてしまうことである。

「風化」によって何を恐れているのかと言えば、いまだ復興していない自分たちが忘れ去られてしまうことである。

連載  
むかしばなし



第十話  
戦いは  
昼めし前に



奥羽越後現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、仙台に移住。市内のケルト音楽サークルに所属し、あちこち出だし演奏する。フィドル(ヴァイオリン)担当。

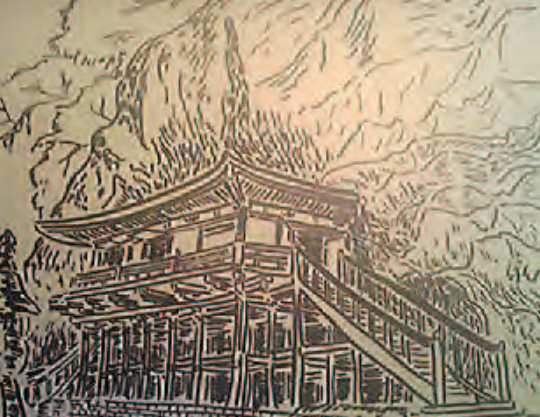
「憑依?イタコか、こいつ。」  
「そなた、惚れた娘を助け」

鞭(むち)の陣幕はあらかた焼けた。武者らは外へ出払っていた。正午に達した陽射しが、後に榴ヶ岡と呼ばれている事になる高台に照り付けている。藤原泰衡に伴われて野天に出た「偽武者」少年・祝魚が、傍にたつ少女・若に毒づいている。  
「こいつ、なしたのだ。ほろけたみでえになつて。」  
「この娘、まだ我が兄が憑依している。無闇に動かしはならぬえ。」  
泰衡が穏やかに諫める。  
「憑依?イタコか、こいつ。」  
「そなた、惚れた娘を助け」

「来たのではないのか。」  
「馬鹿こがねえでくれ。俺の惚れた女子は仙臺き攫われでいった。それば助けに汽車に乗ったでうな、は。」  
「仙臺。この地に広がるという、未来の都か。」  
「都なの、ろくなもんでねえ。金に飽かせて、田舎の貧しさにつけ込んで、女子供を買ひ漁っていく。お幹さん手えず奴はいかなる長者肝煎なりとも許さねえ。」  
後ろから聞いていた長里国八郎が口を挟む。  
「少年、小田原遊廓に売られた娘を連れ戻しに行くと言うのかね。」  
「んだ。何度も言わすな。」  
「無茶な事を考えてはならん。娘さんは家の困窮の為に莫大な借金を背負い、その返済として遊廓で働くのだ。連れ戻したいなら、君が借金の肩代わりをする必要がある。」  
「何を!おっさんは周旋屋とかいふ輩か?」  
「馬鹿な。もし強引に娘を連れ去りでもしてたら娘さんご家族がどうなるか。」  
「鎧を剥かれた格好の武者が、仲間を助けられながらよたよたと歩いてきた。」

「その小僧です!俺の槍と鎧を盗みやがった。」  
泰衡がその怒りを宥める。  
「達兵衛を出し抜くとは、只者ではないな、祝魚殿。それにしても、仙臺とはそげな都か。民を飢えさせ貧しさにつけ込むなど、平泉ならばあり得ねえ。」  
長里が苦々しく答える。  
「国が認めた、つまり公娼制度なのです。下手をすれば、牢に入れられるのは少年の方です。」  
「その国とは・・えみしの国ではない訳か。」  
「はい、残念ながら。しかし、東京の吉原などでないだけ、まだいい。ああ・・東京とは、私どもの時代の帝都で、坂東の平野に広がっております。帝が京から移られたのです。」  
「何と・帝がそげに近くに。思いもかけねえ話だ。」  
「吉原は何百年と続く膨大な遊女達の町です。しかしここ数百年は貧しい奥羽の村から買われたり攫われたりした娘が多くなつているとか・・それこそ遺憾であります。」  
「何のお話をされているのですか?」  
いつの間にか、少女が正

気を取り戻してキョトンとしている。祝魚が慌てて、「何でもねえやい。」と怒鳴る。泰衡が、暗い面持ちで尋ねた。  
「若子殿。兄・国衡は討ち死になされたか。」  
「いえ、逃られました。」  
長里が大層驚く。  
「柴田の泥田で討たれたのではないのか。」  
「はい、今も馬で駆けておられます。」  
泰衡の髭面に笑みが広がる。それにしても、仙臺とはそげな都か。民を飢えさせ貧しさにつけ込むなど、平泉ならばあり得ねえ。」  
長里が苦々しく答える。  
「国が認めた、つまり公娼制度なのです。下手をすれば、牢に入れられるのは少年の方です。」  
「その国とは・・えみしの国ではない訳か。」  
「はい、残念ながら。しかし、東京の吉原などでないだけ、まだいい。ああ・・東京とは、私どもの時代の帝都で、坂東の平野に広がっております。帝が京から移られたのです。」  
「何と・帝がそげに近くに。思いもかけねえ話だ。」  
「吉原は何百年と続く膨大な遊女達の町です。しかしここ数百年は貧しい奥羽の村から買われたり攫われたりした娘が多くなつているとか・・それこそ遺憾であります。」  
「何のお話をされているのですか?」  
いつの間にか、少女が正



封印された「窟」のひとつ? 達谷窟(岩手県平泉町)

「彼は、悪路王が末」

一行は、青葉神社が建つ事になる高台森の奥へ進む。やがて、巨大な板状の石が倒れかけた老樹を支えるように組まれた建造物が見えてきた。  
「これは・・岩ですか。」  
賢治の問いに、ヤエトは答える。  
「これは裏門にすぎぬ。窟が封じられたので、我々が穿った洞だが、力は限られている。」  
「力とは、何ですか。」  
「お前は、えみしか。さもなくば答えぬ。ここで殺すがいい。」  
「えみし・ですか。私どもは、えみしなのではないか。」  
賢治、一行全員に問いかけるように言う。  
今純三が拳する。  
「ところで、守隅君はどこですか。」  
「彼は、悪路王が末

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

「自由に行ける、じゃと・それができるのならば。」  
「どうしましたか、芭蕉さん。」  
賢治が心配そうに声をかける。  
「いえ・・ヤエト殿、この洞の道は、どこへ通じていると申される。」  
「お前は、えみしか。」  
「都加留は比内(ひな)の出である。芭蕉が、初めて出自を口にした。ヤエトよりも古い時代・比内は津軽だったか。」  
「では、通じる所へ出てみるとしよう。」  
そう言って、ヤエトは手を巨石に添えながら、石組と巨樹の作り出す洞へ踏み入っていく。一行、芭蕉から続いて行く、たちまち暗闇の向こうに光が見える。おぼつかぬ岩場に足を取られながら抜け出た先は、やはり森の中。別の石組で作られた、出口である。  
「ここへ、出たかったのであらう。」  
「まさか、大崎八幡宮の建つ事になる、森ですか。」  
先程の場所から数十分歩かずなのだが、もの一分しか、洞を通っていない。ヤエトが、冷淡な口調の

# シリーズ 遠野の自然 「遠野の冬」 遠野 1000 景より



今年の雪は全国的に異常だった。例年だと北極近辺にとどまっている強い寒波が南下して、日本を襲って

いるせいでというが、とにかく二月の雪はすごかった。寒波襲来が先行した北米は特別だと思っていたが、長期天気予報が当たってしまった。  
また、北国の雪もすごいらしいが、関東や甲信が特にすごかった。雪に埋もれて孤立した地域もあった。観測史上初の大雪というところもあった。ということは、百年以上経験したことがない雪ということである。

## 雪の千葉家曲家

まずは雪の中の千葉家曲家。遠野の有名な「曲家」として有名で



氷筍

◆ そんなことで、今回で「遠野の冬」シリーズも3回目。前回とは趣を変えて、雪と家と、前回ご紹介できなかった「氷筍」、それに印象深い雪の風景を取り上げてみる。

◆ 遠野の冬もすごいかもしれないが、なんだか逆転したような感じである。

◆ 「しづき氷」は、この写真を一瞥した際に、湖の上を走るカモシカの脚が写っているのかと思った。湖面から突き出ている木が脚で、氷のひづめ。湖面上を

◆ 遠野の冬もすごいかもしれないが、なんだか逆転したような感じである。

◆ 平安初期、大和朝廷と蝦夷の間の三〇年戦争当時、アテルイとその一派が、冬の季節に東の間の平和を築きしんでいる状況が思い浮かんできそうである。

◆ 「しづき氷」は、この写真を一瞥した際に、湖の上を走るカモシカの脚が写っているのかと思った。湖面から突き出ている木が脚で、氷のひづめ。湖面上を

◆ 筆者の勤務先は山梨県と神奈川県の境界線上にあるが、先月中旬には1メートルもの雪が降り、大変な目に遭った。凍った雪道を小一時間歩いて駅から会社までたどり着き、あとは雪かきの日々。二週間以上の雪かきで、とうとう腰を痛めた。

◆ ある。約二〇〇年前に建てられたこの曲家は、住居部分が122坪、畜舎部分が41坪程の広さで、かつては作男15人、馬20頭ほどいて、下を見渡して目の届く田畑は、全てこの屋敷の主干葉氏の所有だったといわれている。自然の地形を利用して、石垣を組み悠然とした佇まいは、さながら城郭のようである。

◆ もうひとつの家の写真も雪のなかの家。千葉家曲家とはずいぶん異なる。カヤ葺き屋根に積もった雪が屋根の歪みを際立たせている。もうだれも住んでいないのであろうか。



郊外の風景



しづき氷

◆ いることからこの名で呼ばれる。調べてみたら、ほぼ完全な単結晶となっているため、よく滑る氷としてスケートリンクの氷に活用されているようだ。輪切りにした氷筍を敷き詰めてリンクとするとのことだが、かなりの数の「氷筍」を集める必要があるのだろう。

◆ 「雪煙を残して」。列車は雪煙を巻き上げながら疾走している。SLなら、まさしく煙だが、これは雪の煙である。雪の多い地域ならではの景色である。

◆ 例年なら四月になれば、雪解けとともに花々が咲き始める頃である。筆者はともて寒がりであるため、春の到来が待ち遠しい。春よ来い。早く来い。寒さですっかり硬直した身体を揉み解きたい。



冬使われない橋



氷筍

◆ 「氷筍(ひょうじゆん)」というが、洞窟に発生する逆さの氷柱のことである。マイナス3度程度の洞窟内で発生するらしい。上から滴り落ちた氷が瞬時に凍りついたもので、タケノコ(筍)のような形状をして

◆ 「冬使われない橋」。雪に埋もれて、足跡さえない。まことに子供じみている

◆ 遠野の冬シリーズは、こ



雪煙を残して

# 東北地ビール紀行 その⑥ 山形県編

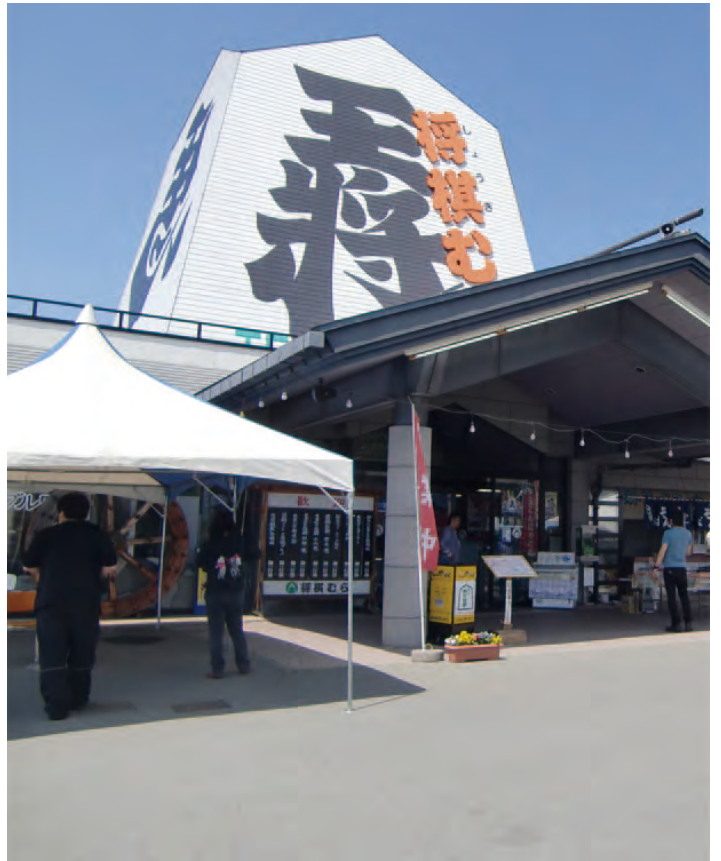
## 山形県内で唯一の地ビール

山形県内には現在、一つの地ビール醸造所と二つの地発泡酒醸造所がある。今



回はこれらを紹介していきたい。

まず、唯一の地ビールは山形県中部、月山の麓の西川町にある「地ビール



将棋むら天童タワーでは様々なフルーツの地発泡酒が飲める

## 月山名水館では出来立ての「地ビール月山」が飲める

後で紹介する二つの醸造所が果物や蕎麦などを使った特徴的な地発泡酒を造っているのは対照的に、麦芽とホップのみで造る地ビール月山は地味な印象もあるが、そのクオリティーは高く、多くのビール好きに評価されている。看板メニ

月山」(<http://www.gassan-shop.com/SHOP/117882/list.html>)である。ドイツの「ビール純粋令」に忠実に、麦芽とホップのみを使い、月山麓に湧き出す「月山自然水」で仕込んだ地ビールである。馴染みあるピルスナーと、濃い色のミュンヒナーが定番で、それに季節ごとの限定ビールが加わる。

「水沢温泉館」という日帰り温泉施設があるので、これまでで紹介した岩手の沢内銀河高原ホテル、秋田のたざわこ芸術村、宮城のや

ユーのピルスナーは、普段あまりピルスナーを飲まない私が飲んでも他のビールとは違うことが分かる味である。ヴァイツェンなど地ビールに多いスタイルのビールが苦手という人にもぜひ飲んでみていただきたいビールである。

くらしいゾード、夢実の国、オニコウベと同様、湯上りに地ビールを飲むという「極楽体験」もできる。ただし、この「月山名水館」、道の駅であることと分かるように、車以外では行きにくい場所にあるのが地ビールを目的に足を運ぶ際のネックと言えは言えるかもしれない。尤も、その気になれば山形市からJR左沢線と路線バスを使って行き来することもできる。

二つの地発泡酒には「果物王国」山形の果物を使ったものがある。その一つは国道48号線沿いにある「将棋むら天童タワー」(天童市大字久野本1273-2 TEL023-653-3222 <http://www.shoginura.com/>)が醸造している「将棋(こま)のさとブルワリー」と「果実むらブルワリー」の二種の発泡酒である。前者はピルスナーやスタウトなど、ビールと同様の種類の発泡酒、後者は山形が誇るラフランスやさくらんぼ、りんご、ぶどうの発泡酒である。

## 「果物王国」の地発泡酒

地ビール月山以外の二つの地発泡酒は、いずれも将棋の駒の製造で有名な天童市にある。東北で「果物王国」というと山形と福島を指すことが多いが、これら

「将棋むら天童タワー」内にある売店で瓶のものが購入できる他、食堂ではこれらの樽生が飲める。これ



## 全国でも珍しい温泉ホテルが醸造している地発泡酒がある 湯坊いちらく

もう一つは、天童温泉内にある温泉ホテル「桜桃の花湯坊いちらく」(天童市鎌田本町2-2-2 TEL023-654-3311 <http://itiraku.com/>)内にある天童ブルワリーが醸造している地発泡酒である。ここでは、さくらんぼを使った「聖桜坊(セントチェリー)」、蕎麦を使った「Mr.A(ミスター・エー)」の、山形らしさ二種の地発泡酒が飲める。

先述のように、「地ビール月山」を始め温泉施設が併設され



ジ・アーキグラム・ブリティッシュ・パブ&カフェでは常時各地の地ビール数種類が樽生で飲める

## 各地の地ビールが飲める店も

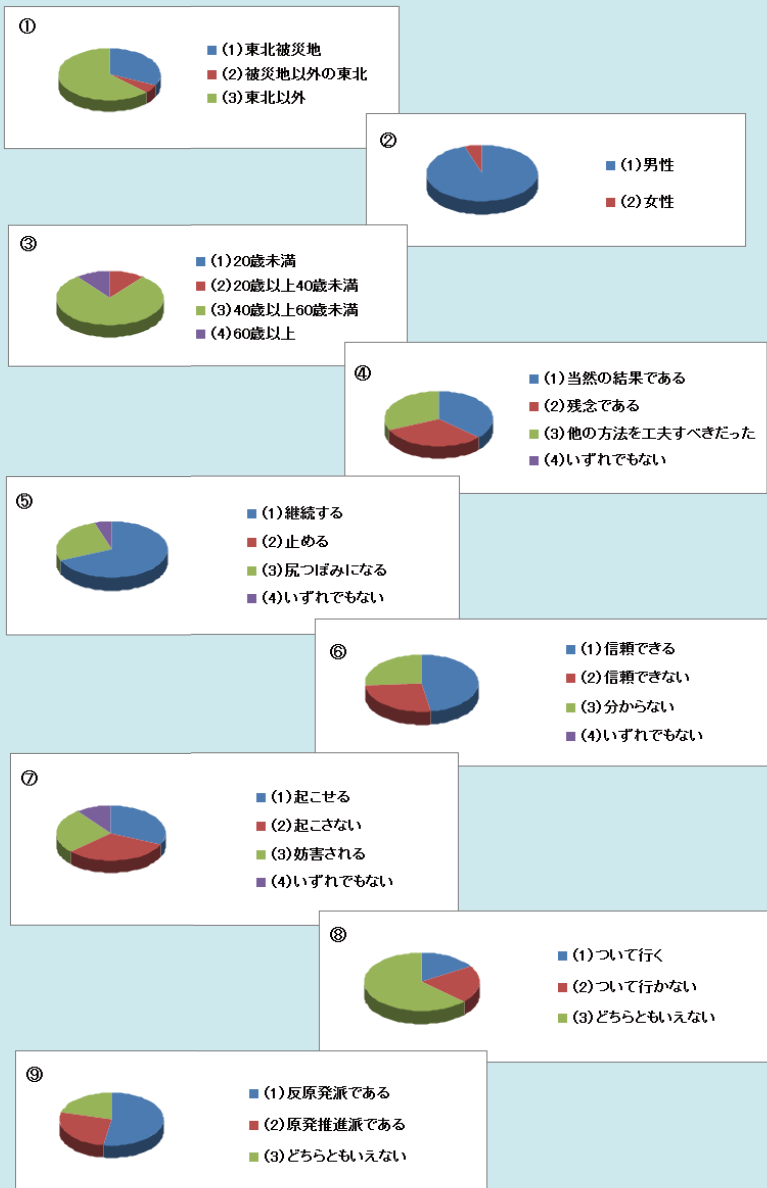
他に、醸造所ではないが、全国各地の地ビールが樽生で飲める店もある。山形市にある「ジ・アーキグラム・ブリティッシュ・パブ&カフェ」(山形市十日町2-1-35 TEL023-622-7570 <http://thearchigram.com/>)がその一つである。

イギリスのパブ風の雰囲気の中で、各地の地ビールが常時数種類樽生で飲める。何が飲めるのかはその時々で違うので、行く度に楽しみがある。東北以外の地ビールが樽生で飲める店は、東北では私が知る限り、ここが秋田市にある「酒場戸隠」(秋田市山王2-7-29 TEL018-863-8699 <http://akitag.exblog.jp/>)へようこそが貴重である。

ただ、山形市内には系列の居酒屋「かくれ居酒屋桜桃の花」(山形市十日町4-2-7ホテルキヤッスルB1F TEL023-632-3687 <http://itiraku.com/?p=log&l=205930>)がある。実はここでこれら二種の地発泡酒の樽生が飲めるので、温泉に宿泊して飲むことが難しい場合はこちらがオススメである。

## 第21号 ネットアンケート集計結果 小泉元首相と反原発活動

No.	質問と選択肢	回答数
①	住所	
	(1) 東北被災地	6
	(2) 被災地以外の東北	1
	(3) 東北以外	12
②	性別	
	(1) 男性	18
	(2) 女性	1
③	年齢	
	(1) 20歳未満	0
	(2) 20歳以上40歳未満	2
	(3) 40歳以上60歳未満	15
	(4) 60歳以上	2
④	東京都知事選での反原発活動	
	(1) 当然の結果である	7
	(2) 残念である	6
	(3) 他の方法を工夫すべきだった	6
	(4) いずれでもない	0
⑤	小泉元首相は活動継続か?	
	(1) 継続する	13
	(2) 止める	0
	(3) 戻つばみになる	5
	(4) いずれでもない	1
⑥	反原発活動での小泉元首相への信頼	
	(1) 信頼できる	9
	(2) 信頼できない	5
	(3) 分からない	5
	(4) いずれでもない	0
⑦	今後、小泉元首相は反原発の波が起こせるか?	
	(1) 起こせる	6
	(2) 起こさない	6
	(3) 妨害される	5
	(4) いずれでもない	2
⑧	小泉元首相の反原発運動に国民はついて行くか?	
	(1) ついて行く	3
	(2) ついて行かない	4
	(3) どちらともいえない	12
⑨	あなたは反原発派ですか?	
	(1) 反原発派である	10
	(2) 原発推進派である	5
	(3) どちらともいえない	4



今回のテーマは「小泉元首相と反原発活動」でした。東京都知事選での反原発のノロシは不発に終わったようですが、元首相・小泉氏の反原発演説はそれなりにインパクトがあったようです。「変人」と言われた人物なので、今後どうなるかについて皆さんがどう思っているかお聞きしたくなりました。回答者数は19名。

「小泉元首相や細川元首相の、東京都知事選での反原発活動は不発に終わったが、どう感じたか?」は、見事に三分して、「当然の結果」が少しリードで、約36・8%、「残念」と「他の方法を工夫すべき」が同数で約31・6%。「小泉元首相は活動継続か?」は、圧倒的に「継続」が約68・4%。「反原発活動での小泉元首相への信頼」は「信頼できる」が約47・4%とリードし、「信頼できない」と「分からない」が同数で約26・3%。「今後、小泉元首相は反原発の波が起こせるか?」は、「起こせる」と「起こさない」が同数で約31・6%。「妨害される」が約26・3%。「小泉元首相の反原発運動に国民はついて行くか?」は、ついて行くか、行かないか「どちらともいえない」が圧倒的で約63・2%。最後の質問「あなたは反原発派ですか?」は「反原発派」が約52・6%、「原発推進派」が約26・3%、「どちらともいえない」が約21・1%となりました。

### 編集後記

東北大震災発生から3年目を迎えた記事を書いていて、いろいろ考えさせられたことがある。

まずは、あらためてこの大震災の大きさに気づかされたことである。震災直後にはつきりと分からなかったこともいまなら整理できて、全体像も見えてくる。

あのときはショック状態で、正常な判断力を失い、なかなか元に戻れなかったことによりやく気づいた。

もうひとつは、今後の復興を考えると、マスメディアだけの情報を鵜呑みにしてはならないことを痛感したことがある。

復興予算執行遅れの主な原因として、巷間言われるような工事単価上昇による採算が困難なため入札が出来ないとか、復興に要する人手不足が原因で遅れているとか、行政側の専門人材不足のせいだとか、住民合意形成問題がネックとなつて遅れているとかいった報道が多かった。

しかし、遅れの最も大きな要因はそれらではなく、臨機応変に公的資金を活用できない制度の制約問題が大いこのことである。

これをマスメディアが報道しないのだ。事実を伝えるのが使命のはずだが、それどころか、事実を歪曲するような事態は許されない。当方も心して新聞発行に望みたいと思う次第である。

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

#### ・プロジェクト募集要領

- ① 東北の復興、活性化、再興を目的としたプロジェクト企画であれば、何でも可
- ② 応募資格は特に定めず、被災地、被災地以外の居住も問わず、国籍・年齢・性別を問わず
- ③ 企画書のようなものがあれば可---形式自由 (プロジェクト名、プロジェクト期間、目的、どうやって実現するかの手段、仲間などを明記していただきたいと思ひます)
- ④ ✕切はとくに設けません

### 「東北を世界に！」プロジェクト募集

#### ・連絡先/企画提出先

(郵送) 〒207-0005  
東京都東大和市高木3-315-1  
ホームタウン宮前2-2  
電子タブロイド新聞【東北復興】宛  
(メール) yumuyu@wj8.so-net.ne.jp

・ご提案いただいた企画については、当新聞で責任をもって検討させていただいた上で、企画開始に向けてのしかるべき方法・手段をご提案するなり、企画実現のための仲間を募ってまいりたいと考えております。また、当新聞でご紹介させていただきたいと思ひます。(氏名公表か非公表かはご相談)

・たくさんのご提案をお待ちしています